

がん患者の 在宅ホスピスケア

川越 厚



がん患者の在宅ホスピスケア

川越厚 著

定価2730円(本体2600円+税5%)
医学書院 ☎03-3817-5657

なにげない日常生活を送るなかで、折思ふことがある。あと何回くらい、こうして朝目覚めて、歯を磨くのだろう。あと何回くらい、家族と食事ができるだろう。人生の最期は、住み慣れたわが家で、使いなじんだ自分のベッドで天窓を眺めながら逝くことができるだろうか。「がん看護」「緩和ケア」と名のつく研究室を担っていることもあり、「死」あるいは「人生の終わり」について考えることがしばしばある。それは看護職として死に逝く患者に残された時を思うことであつたり、身内や自分自身の死に際のことであつたりとさまざまである。

生まれた瞬間から、人は死に向かつて生きていく。死は、誰にも必ず訪れるき

わめて身近で自然な現象である。普段はまったく意識になくても、あるいはないことのように振る舞っていたとしても、死はすべての人に平等にやってくる。

本書は、在宅ホスピスに20年以上専心してきた著者が、専門的に在宅ホスピスに携わる者に向けて記した書である。著者がこれまでに関わった約2000人のがん在宅死の経験をもとに綴られており、圧倒的な説得力をもつて頭（認知）と心（情動）に迫ってくる。

本書の特徴は、次の3点に尽きる。

1 点目は、医療の専門書であり、論理的である。たとえば、終末期がん患者の症状マネジメントについて、基本的な薬理作用と作用機序、選択の順序を根拠とともに解説している。また、がんの発生部位別に出現する症状と治療についても、簡潔かつ明瞭に記されている。

2 点目は、在宅ホスピスに携わる医療職の指南書として、きわめて実践的なことである。膨大な数の在宅死の経験に裏づけられた、専門職にとって「即戦力」の知見がふんだんに盛り込まれている。

たとえば、一人暮らしの在宅ホスピス患者の「独居の類型化」、在宅ホスピスを進めるうえでの「難易度予測指標」、義務化型・愛情型・精神化型・償い型に類型化

される介護者の「介護動機別ストレス」など、著者独自の分類に則って具体的な介入内容が詳細に示されている。

そして3 点目は、何より「おもしろい」ことである。専門書に対する表現としてはいささか不適切かもしれないが、あえてそう表現したい。随所に事例が盛り込まれ、小説にも勝るおもしろさがある。

本書の事例は、必ずしも模範的で、すばらしい家族愛に包まれた大成功例ではない。しかし、登場する患者、家族、医療者それぞれが、可能なかぎりの知恵と力を出し合い、患者・家族ケアに尽力している。そしてどのような転機になろうと、結果を受け入れる姿が記されている。そこには静かな情熱と潔さがあり、著者の人間愛と度量の広さを感じさせる。

読み終えたとき、誰に向けられた書であるのか改めて考え、確信を得るに至った。患者・医療者の別なく、在宅死を望むすべての人に向けられた書である。在宅死は、自身の死を主体的に受け止め、受け入れる覚悟が必要である。逆を言えば、それがあれば独居であつても在宅死は可能だと著者は言い切る。自身の死を生を、自分のものとして責任をとる覚悟があるか。生きること、死ぬことを考えるすべての人に薦めたい良書である。